

---

# 東方【 I F 】の平和世界

榊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方【IF】の平和世界

### 【Nコード】

N0320BA

### 【作者名】

榊

### 【あらすじ】

狂王物語、悲劇と狂気、そして血に塗れた絵本は既に終わり、彼女達は世界の表から姿を消したのだった。そう、既に幕は閉じられ、狂気の絵本は終わったのだ。コレは【番外編】だ。せめてあの戦いの後、彼女達が平和でありますように。

## プロローグ（前書き）

帰って来ました、プロローグと言う事で短めです。

## プロローグ

今日も今日とてそこは平和だ。外の世界の様に文明が発達していかもしれない。時間のゆっくり流れるその場所の名前は幻想郷。少し前に大きないざこざがあつたが、今では平和な物だ。

今日も紅白の巫女がため息を吐く、こたつと言う外の世界から流れ着いた物に豆炭を少し足して弾幕で火を付ける。弾幕と言っても小さな火の玉的な物だ。

「よう！霊夢、今日も遊びに来たぜ！」

「魔理沙・・・この寒いのに何でそんなに元気なのよ」

「私にはミニ八卦炉があるからな、これに少し力を送っておけば発熱して暖かいのぜ」

「羨ましいわね、家にはこの炬燵位しかないから寒くてね」

「稗田の家に行けば暖かいんじゃないか？あそこにはもうアイツも帰って来てるんだろう？」

「ああ、朝霧の事ね」

朝霧とは、この幻想郷が出来る以前から協力していた者の事だ。白銀の長すぎる髪に陰陽服、そして雪以上に白いかもしれない肌。無名の神、人間の賢者と呼ばれている。

そして、この世界線の稗田阿求は稗田阿礼以前の稗田、稗田阿明の頃にその朝霧と婚姻し、今、九代目で再開、稗田は不老不死の存在に成っている。周囲に降り積もる雪すら解かすバカツプル、いや、

馬鹿夫婦だ。

「あの家に行くと阿求の視線が痛いだよ」

「あー・・・解るぜ。あの目は地霊殿に行く前を見た・・・あのパルスィ・・・だったか？同じ目だからな」

「うおー！霊夢！雪だ雪！」

「っさいわね萃香、鬼は良いかもしれないけれど私達は寒いのに障子を閉めてくれないかしら！」

外の世界では雪が降れば子供が喜ぶと言うが、本当であろうか。今一解らない。自分がこの神社を先代博麗から継いだ時から雪で遊ぶ事は全くしていなかった記憶がある。どちらかと言うと雪掻きが面倒だ。一度魔理沙にマスタースパークでお願いしたが、神社ごと綺麗に掃除されてはたまったモノではない。

「12月31日には宴会に限るぜ！」

「馬鹿なのね、魔理沙って。どう考えてもこの寒いのに敷地内で酒を飲むって言うのも寒いでしょうに。ソレにこの時期紫は冬眠している筈よ」

「ソレは違つぞ霊夢」

瓢箪の中からわき出る無制限の酒を煽っていた萃香が瓢箪から口を放す。キュポツと音がした後に銀色の糸が瓢箪と彼女の口を繋ぐ。それを乱暴に拭いアルコールの入った瞳で霊夢を見た。

「今年は何を持ったか起きてるらしい、式から聞いた」

「式・・・？ああ、あの狐ね」

「紫の保護者だぜ・・・あの狐」

八雲藍、彼女は苦勞人とも言えるレベルだ。全員その光景が頭に浮かびうんうんと首を縦に振る。

「それにしても何の冗談かしら、あの妖怪が起きているなんて」

「何でも今年は初日の出を見るとか言ってたらしいよお」

そう言うと萃香は急に横に成り、そのまますぐに規則正しい寝息を立て始めた。おやすみ三秒とはまさにこの事であろうか。その内鼻提灯の出て来そうな彼女のとろける幸せそうな寝顔を見ると少し腹立たしくなってくる。

「にしても、この鬼は本当に最近よく寝てるよなあ。山の神社にも出没して、鳥居の上で寝てたって聞いたぜ？」

「まあ・・・萃香だから良いんじゃない？あの山の神社の神とは呑み友達とか言ってたし」

「うげ、神すらコイツの侵入を阻めないのかよ」

「粗ぶれば鬼、静まれば神と云うでしょうに」

そう言うと霊夢は彼女に薄い布団を掛ける。彼女の優しさであろう。博麗神社は、今日も平和で、それでも何か、物足りなさそうであっ

た。

## プロローグ（後書き）

短い物しか描きませんが、これらかもよろしくお願ひします。



薪はいらんかね？（前書き）

狂王物語、その中の人物数人が登場します。

薪はいらんかね？

息を吐くと白く曇り、空には蒼穹の空に白昼の月が浮かぶ。寒い季節だ、ソレも今日は異常に寒い。戸を開けてもそこにあるのは土色の地面だけで、遊ぶほどの雪はまだ積もっていない。子供なら心底心を躍らせる事だろう、しかし今の自分にとって雪はただの冷たい物であった。

歳はとりたくない物だと寺子屋の教師である慧音は腰を戸を全て開けた。家の中には優しい光りが入り込み眼を細める程に眩しい光りを手でさえぎる。

それと同時に、彼女は朝から大きな声を上げた。それもそうだろう。庭先に全身を甲冑で包んだ人物が立っていれば驚かない筈がない。しかもその手には鈍く光る剣を持っている。

「だっ誰だお前!？」

『声で判断しろ』

「朝霧か!？何でまたそんな恰好で!!」

朝霧八雲、人間の賢者は非常識とも言えるほどの恰好で登場した。

『五月蠅い、薪はまだ足りてるか?』

「ま、薪か?それならまだあるが・・・」

『そっか、では次に行く』

そう言つてガシャガシャと音を立てて出ていく朝霧に慧音は声を掛ける。とりあえずその鎧を脱げ!と。

そして、彼女達は今、炬燵に豆炭を入れてお茶を啜っていた。もちろん朝霧は鎧を脱いでいる。

「何で朝からあんな恰好していたんだ・・・」

『何故つて、あの鎧は耐寒術式も兼ねている。驚きの温かさだ』

「他から見ると恐ろしく無気味なんだよ!!何で剣も持っていたんだ!!」

『薪を切つて来てな、ソレに使っていた』

その言葉に慧音はガクツと頂垂れる。何処まで世間体を気にしていないのか。これでも子供に好かれているのだから全く意味が解らない。そんな慧音の考えを無視するかのように朝霧は袖の中から毬を取り出し転がして遊んでいる。

「そんな名刀を使う事じゃないだろうが!」

『使わずに錆びさせるのも駄目だろう!?!』

刀などは使うと血糊などで錆びたりします。何もしなくても確かに酸素に触れて錆びますが。

「それでもあんな恰好してれば不審者として妖怪の賢者たちが大騒ぎするぞ!?!」

ソレはそうだろう、彼女は生前、鬼武者として恐れられていた元人

間だ。そんな人物が刀を振り回しながら完全武装していれば誰もが警戒するだろう。

『あ、また降って来やがった・・・』

「ソレはしょうがないだろう・・・この寒さでこの季節だ」

『寒波まで幻想入りするもんかねえ・・・』

「ソレは無いだろう、此処でコレだけ寒いんだ、天界なんて極寒だろうよ」

『地霊殿にでも行こうかなあ。あそこなら温かいだろう、地熱で』

「温泉か、だがあそこは鬼にすぐ絡まれる」

地底は地上では危険な妖怪の集まりだがこの数百年の間で妙に丸くなった者が多い。今では観光に行く者も多く、地霊ではソレを迎え入れる宿まで建設された。

因みに、名物は古明地饅頭と地霊温泉卵。

『酒の飲みが多いのはしょうがないさ、皆暇なんだ』

「だが平和が一番だろうに」

『今度異変でも起こすかなあ・・・』

「犯罪勧告は止める」

本当にやりかねないのだ。昔にも異変を起こそうとした事があった

し、実際に山の神社を壊滅一步手前まで追い込んだ事がある。

『はぁ・・・あつたまるなあ、動きたくねえ・・・』

「お前、いま威厳も何も無いぞ」

『良いんだよ、何時もピリピリしてると疲れるだろう』

山の神しかり、新しく異変を起こした連中同じく、だ。最近あのキ  
ョンシーと妙に仲良くなってしまったと思う朝霧。まあお互い既に  
アンデッドなので通じる物があるのだろう。その他にも布都とか言  
う人間？ともよく話をしている。まあ、どちらかと言うと孫の感覚  
に近いが。

「それにしても、昔は戦闘狂だったお前は良く落ち着いたなあ」

『五月蠅いよ小娘、私から見ればお前もまだ私の半分も生きていな  
いんだぞ？』

「この時間の停止した幻想郷でその言葉が意味を持つとも思えない  
けど？」

『はは、確かにのお』

そう言うと彼女は遊んでいた毬を袖の中にしまった。しまったかと思  
うと次は普通に立ち上がり鎧を装着した。剣は腰の鞘に収まっている。  
いる。

『私はそろそろ行くよ、美味しいお茶をありがとうな』

「何だ、やっぱりその恰好で回るのか、変人扱いされるぞ？」

『男から女神に成った時点で私は変人かと思うがね？』

「……(汗)」

豪快に笑うと彼女は赤黒いマントを靡かせながら白い雪が降る中へと進んで行った。次は誰の家に行くのであろうか、不安しかない。それより、誰の家に行くと言うより次は誰が犠牲者かと聞いた方が良いのかもしれない。

「あや？こんな朝早くからどうしたのですか慧音さん」

「文か……いや、お前に教えるところで無い事になりそうだな」

「大丈夫ですよお、清く正しく、射命丸ですよ？」

「お前そう言いながら前、紅魔館の吸血鬼の母を怒らせてただろう？」

紅魔館に住む吸血鬼姉妹の母、本名は既になく、宝石の翼と蝙蝠の翼を持つ髪の毛長い吸血鬼でシングルマザーである。男性を必要としない出産方法を試した結果、シングルマザーに成ったのだ。そして不思議な髪色をしている。金髪と青髪が混じった様な色の髪を持ち主である。

「ですが、今からでも遅くはありません、幻想卿最速は伊達じゃない！と言つ事で追いかけますねえ！！」

「あ、おい！！……はあ……何も起きなければ良いが……」

慧音は自分の予想が的中しない事を祈るだけであった。

薪はいらんかね？（後書き）

シリアス？今回は関係ない・・・答



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0320ba/>

---

東方【IF】の平和世界

2011年12月31日23時53分発行